

Title	吐魯番出土文物研究会会報 第13号（新著紹介号）
Author(s)	
Citation	吐魯番出土文物研究会会報. 13 p.1-p.6
Issue Date	1989-05-15
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78823
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

吐魯番出土文物研究会會報

第 1 3 号

1989年5月15日

(新著紹介号)

吐魯番出土文物研究会

【は じ め に】

前号では、1987年（一部、1988年）に中文で公表された吐魯番出土文物関係の論著のうち、高昌郡・高昌国関係のものを紹介したが、本号では、これに続けて同年に公表された論著のうち、主として唐西州時代に関するものと史料集を取り上げてみた。前号同様、論著の選択は偏に紹介者の関心に基づいたものであり、おそらくは多くの重要な論著を洩らしていることと思う。読者のご海容を乞う次第である。

なお前号と本号に掲載した各紹介文は、担当した会員個人の責任において執筆されたもので、研究会としての見解を示すものではないこともお断わりしておきたい。

★

★

★

★

◆陳良文「吐魯番文書中所見的高昌唐西州的蚕桑絲織業」

（『敦煌学輯刊』1987年第1期）

高昌郡、高昌国、そして西州時代を通じて吐魯番盆地で蚕桑・絲織業が展開していたことを、文書をはじめとする出土文物を駆使することによって紹介した論稿。

著者は、先ずこの地にも穀田や葡萄園などとともに桑田が存在していたこと、養蚕が行なわれていたこと、そして当然のことながら絲織業も行なわれていたことを、郡・国・州時代それぞれについて明らかにする。また随葬衣物疏の文言や実際の出土品、さらには国・州時代には賦税すら絲織品で納入されていたことなどを根拠として、絲織業が広範に普及していたことを主張する。このほか、中国内地からこの地に絲織技術が伝えられた時期については、漢・魏の頃と推定し、大谷3045号、同3097号文書を引いて、西州時代の絲織品の価格についても紹介を行なっている。

『吐魯番出土文書』の公刊をはじめ、各種の文物に接することができるようになって、この地では絲織品は生産されず、中国内地の産出品が交易されるにすぎなかったという所説がいまなお根強く残っている現状に対する批判としては、著者の意図は充分に実現されていよう。ただ郡・国・州時代を通じて一貫して絲織業が盛況を極めていたかという点については、議論が分かれるところだと思う。

(N)

◆陳国燦「武周瓜、沙地区的吐谷渾帰朝事迹（副題略）」

（敦煌文物研究所編『1983年全国敦煌學術討論會文集』文史・遺書編上冊、蘭州甘肅人民出版社、1987年）

本稿は、阿斯塔那225号墓より出土した豆盧軍作成の敦煌文書と、それに関連する大谷文書（1401、3366、3369、3370、3761号）を併せ移録し、これらを手がかりとして、聖暦二（699）年に行なわれた沙州と瓜州への吐谷渾勢力の投降に

について詳細に検討したものである。この問題については、既に齊東方氏が、同文書の一部を引用して考察しているが（「吐魯番阿斯塔那二二五号墓出土の部分文書的研究」〈『敦煌吐魯番文献研究論集』第二輯、北京大学出版社、1983年〉）、文書そのものの分析は、本稿において深められている。

齊氏の論稿との大きな見解の相違は、齊氏が文書に見える「墨離川」を青海（ココノール）の近辺と推定し、投降した吐谷渾集団の本拠地も同地に求めるのに対して、陳氏は「墨離川」を、沙・瓜州に隣接した蘇干諾爾湖（スハインノール）の周辺地と認め、内附してきた吐谷渾をこの地に拠る集団と推測することである。特に前者の見解は、墨離に関するP. Demiéville氏のそれを受け入れたものと見做せよう。投降の主体をどのように理解するかは、当時の吐蕃と唐との青海地域をめぐる動向とも関連し、吐谷渾史上見過ごすことのできない問題である。とりわけ、文書の「吐渾可汗」を誰に比定するのか（前者の見解に拠れば、これをチベット史料中の「マガ・ト〔ヨ〕ゴン可汗」に比定できる可能性さえ生まれる）は重要問題であり、今後議論が活発に行なわれることに期待したい。

また本稿では、投降を応接する唐側の軍鎮や將兵についても細かに論究され、「敦煌名族志」（P. 2625）などの検討を通じて、文書に見える豆盧軍の子総管である張令端が、西州の張懷寂や張礼臣親子と同系の一族に属し、この文書が出土した阿斯塔那225号墓の墓主であることを指摘した点は注目される。しかも令端は、西州岸頭府の果毅都尉の身分にあって、同時に豆盧軍の子総管を兼任し、やがて長安三（703）年以後久しからずしてその任を終えた後、敦煌の地で没し、西州に帰葬されたと推定する。同じく阿斯塔那に埋葬された同族とされる張礼臣の墳墓（230号墓）は、この225号墓に近在しており、同様に当墳墓からも敦煌文書が伴出している。阿斯塔那古墳群のこの二つの墳墓に、敦煌で作成された文書が搬入された理由は、この見解に拠るならば、明確に説明がつくことになるが、なお今後様々な角度から検証を進めることが要求されている。

また細かいことになるが、大谷3370号文書に捺されている官印を、陳氏は「沙州都督府之印」として載せているが、「沙州之印」と判読すべき可能性があることを指摘する池田温氏の見解（「沙州図経略考」〈『榎博士還暦記念東洋史論叢』山川出版社、1975年）p. 100）もあることを付言しておきたい。（T）

◆呉震「吐魯番出土的“敦煌文書”」

（敦煌文物研究所編『1983年全国敦煌學術討論會文集』文史・遺書編上冊、蘭州甘肅人民出版社、1987年）

本稿は、先ず阿斯塔那225号墓と230号墓出土の敦煌文書全般を対象にして、各文書の断片の録文を逐一掲載し、それぞれに掲載文書に関する解説を施している。併せて敦煌文書、とりわけ官文書の類が、何故に西州に流入したのかという問題を考察し、その背景に両地域の張氏一族の深い結びつきと、それぞれの地へ相互に官員として赴任することの稀でなかった状況が存した点を指摘する。先に紹介した陳国燦氏の見解の如く、225号墓の墓主を張令端と特定してはいないが、陳氏とほぼ同じ視点に立脚し、この問題を捉えていると見て大過なからう。

さらに230号墓に埋葬されていた敦煌文書が、225号墓出土のものと接合する事実から、230号墓のものは、盗掘による225号墓よりの紛れ込みの蓋然性が高いことを

指摘する。氏は、230号墓を発掘していることが確実な大谷探検隊の将来した文書群の中にも、これらと接合するものがあることを見出しているが、このことは、上述の吐谷渾の投降に関連する豆盧軍文書でも確認される。ただし、大谷文書に含まれる225号墓出土の文書と接合関係の薄い敦煌文書（全て官文書）の存在をどのように理解するか、大谷隊が225号墓をも発掘している可能性を探りつつ、明らかにしていかなければならない。氏自身も認めている如く、先にもふれたように、この二つの墳墓は同一塋区において隣接し、ほぼ同じ時期に造営されたものであり、この両墓へ敦煌文書が埋葬されるに至った状況には、なお別の可能性を考慮しなくてはならず、今後の検討課題となろう。

また、個々の文書解説においては、上掲の論稿でもふれている吐谷渾の投降の問題が取り上げられているが、氏は文書に見える「墨離川」を青海方面に求めず、甘泉水（党河）の上流地域である可能性を主張している。しかしながら同時に、この地は投降に至る一時的居留地であると解釈している如くであり、この吐谷渾部落の拠点に関する今後の氏の見解が注目される。（T）

◆王素「吐魯番所出武周時期吐谷渾歸朝文書史實考證」

（『文史』第29輯、1988年）

上述の陳国燦・齊東方両氏の論稿と同一のテーマを扱ったものである。ここでは、陳国燦・呉震両氏同様に、文書の「墨離川」を青海方面に推定せず、これを瓜州南方に近接した地域に求めているが、投降の吐谷渾集団についての見解は、青海周辺と見る齊氏の立場と軌を一にする。当然そこからは、「墨離川」を降付してきた吐谷渾集団の根拠地とは見做すことはせず、この地を呉震氏と同様に一時的居留地と考える。

本稿の特徴は、齊氏の論稿を一步進め、文書に記載されている投降の意志を伝えてきた吐渾可汗を、慕容宣超（趙）と特定していることである。つまりこのことは、既に唐側に内附している宣超が、吐蕃側より降付してくる青海方面の吐谷渾集団を把握していることを前提とする。これは、青海の吐谷渾勢力の在り方を問う問題でもあり、今後の論争点となろう。

またこの225号墓出土の豆盧軍作成の文書が、豆盧軍より墨離軍に宛てられたとする点も、新たな見解である。ただし、阿斯塔那古墳群より伴出した敦煌文書は、その殆どはもともと敦煌県司に宛てられ、当該県の諸曹司で保管されていたものと認められ、これとの関係を如何に解するか、新たな問題を提起しよう。（T）

◆周偉洲『吐谷渾史入門』

（西寧 青海人民出版社・中国民族史入門叢書 1988年2月 1.20元）

本書は表題の示す通り、吐谷渾史の入門書として書かれたものであるが、著者の周氏は既に吐谷渾史に関する多くの論著を発表しており（『吐谷渾史』（銀川 寧夏人民出版社1985年）註）、本書も基本的にそれらの成果を踏まえてまとめられた好著である。吐谷渾の歴史概説や関連史料の紹介、そして最後には内外の研究史の概観が試みられており、それぞれに手際よい解説が施されている。

ただし、簡略な入門書という本書の性格からであろうか、今まで提出されてきた関連論

稿や論争点への目配りという点については、必ずしも十分であるとは言いがたく、氏の吐谷渾に関する上掲の概説書を併せ参照する必要がある。上述の聖暦二（699）年の吐谷渾の投降についても、単に青海地域よりの内附として叙述されているが、この点でも吐谷渾史研究の専門家である著者には、今後あらためて詳細な検討を要望したい。（T）

◆柳洪亮「安西都護府治西州境内時期的都護及年代考」

（『新疆社会科学』1986年第2期）

安西都護府が、当初西州に置かれていたことは既に明らかとなっているが、これまでは貞觀二三（649）年にそれまでの西州の都護府治が龜茲に遷され、その後永徽二（651）年に起こった阿史那賀魯の反乱によって、再び西州に移治されたとする説が、わが国では定着していたと考えられる。これに対して本稿は、貞觀一四（640）年に西州を設置した時点から、顯慶三（658）年に至るまで一貫して安西都護府は西州に留まったとの立場をとり、各都護の名前とその就任時期及び彼らが帯びた官職名を、出土史料と編纂史料を利用して明示する。

氏によれば、問題となる貞觀二三（649）年から永徽二（651）年までの間、安西都護に就任していたのは、柴哲威なる人物であり、彼はそれまでの都護である郭孝恪に次いで「勅使使持節西伊庭三州諸軍事・兼安西都護・西州刺史」に任じられていたとする。この根拠となったのが、現在吐魯番地区文管所に所蔵されている「唐令狐氏墓誌」であるが、これが如何なる経緯で文管所に蔵められるようになったかは詳らかではない。しかしながら、これまでの説に対して、全面的な再考を迫る史料であることは間違いない。

編纂史料のレベルでは窺えないこうした史実の発掘に、墓誌の果たす役割が極めて大きいことは、この問題からも十分に知られるが、阿斯塔那・哈拉和卓の両古墳群に限ってみても、どれほどの墓誌が出土しているのかを正確に把握できる、正式な報告は今のところ見られない。一日も早い、墓誌の録文と写真の公表が待たれる所以である。（T）

〈なおこの論稿は、1986年に公表されたもので、本紙第7号の目録にも掲載しましたが、その際編者の不注意により、掲載誌の巻号を書き漏らしてしまいました。ここに深くお詫びすると同時に、あらためて紹介することにしました。ご了承下さい。〉

◆新疆社会科学院歴史研究所編『新疆地方歴史資料選輯』

（北京 人民出版社、1987年11月、4.40元）

本書は石器時代から辛亥革命に至るまでの新疆地区に関する代表的な歴史資料を、時代を追って整理・配列したものであるが、序言によれば、この地が一貫して中国の領土の一部分であったという認識を基礎にして編集されている。

全15章のうち、吐魯番出土文物に些かなりとも関係するのは、第三章：魏晉南北朝同新疆地区的關係、第四章：隋朝對新疆地区的管理、および第五章：唐朝對新疆地方管轄の3章であるが、上記のような編集方針のためか、上げられている出土文物は必ずしも豊富とは言いがたい。例えば第三章では、「高昌延壽四（627）年參軍汜顯祐遺言文書」や「高昌延壽八（631）年孫阿父師買舍券」、および「高昌延壽十四（637）年兵部差人往青陽門等處上現文書」などが、この国の都城制や郷里制が、中原地区のそれを踏襲

したものであることを説明するために上げられているが(p. 101)、いずれも文書中のごく一部が引かれているにすぎない。これは第五章も同じで、「武周延載元(694)年汜德達輕車都尉告身」について、『文物』誌上の釈文を引くが(p. 124, 129)、必要最低限の部分にすぎない。しかしこれなどはまだ良いほうで、唐代の辺防軍を列記しているなかには、「蕭鄉軍」というようにその名称だけを上げ、しかもその出典についても、「吐魯番出土文物」としか記しておらず(おそらく新疆維吾爾自治區博物館編『新疆出土文物』(北京文物出版社、1975年)のことであろうが)、「疏勒軍」に至っては、「文書」としかないので(p. 130)、もはや検索作業を放棄するしかない。『西域文化研究』や「中国古代籍帳集録」、『吐魯番考古記』、および『高昌專集』などからも何点か引かれてはいるが、文書番号を欠いているものもあり(pp. 139-140)、総じて資料価値が低く、残念ながら利用することは躊躇される。

(N)

◆王永興編『隋唐五代經濟史料彙編校注』第一編(上・下)

(北京 中華書局、1987年4月、6.60元)

敦煌文書や吐魯番文書に対しても造詣が深い編者が、膨大な史料を項目ごとに分類・整理した史料集で、第1冊目の本書は、「階級和階級關係」なる項目のもとに、多種多様な史料を収録している。

吐魯番文書も随所に引かれているが、まとまったものとしては、①阿斯塔那509号墓出土の各種過所とその関連文書(pp. 89-93, pp. 202-203, pp. 694-699, pp. 960-961, pp. 1046-1048)、②阿斯塔那4号墓出土の左憧憙關係の契約文書(p. 201, pp. 899-906, pp. 959-960)、③阿斯塔那363号墓出土のト老師關係の契約文書(p. 906)、④阿斯塔那35号墓出土の各種籍帳類とその伴出文書(p. 907, pp. 1048-1052)、および文書ではないが、⑤庸調麻布の題記(p. 497, pp. 504-505)などがあり、そのほかにも、哈拉和卓1号墓出土の「唐年次未詳何好忍等匠人名籍」(pp. 135-136, pp. 229-230)と阿斯塔那134号墓出土の「唐麟德二(665)年牛定相辭」(p. 543)がある。

しかしこれらはいずれも、『文物』や『考古』に掲載された発掘報告や研究論文の釈読に依拠しているので、『吐魯番出土文書』が未刊の①と非文書の⑤以外は、全てこの『吐魯番出土文書』の録文と比較対照する必要がある(阿斯塔那4号墓: 第六冊、401頁以下。阿斯塔那363号墓: 第七冊、525頁以下。阿斯塔那35号墓: 第七冊、386頁以下。哈拉和卓1号墓: 第四冊、1頁以下。阿斯塔那134号墓: 第五冊、89頁以下)。また「匠人名籍」のように、同一の文書が複数回引かれている場合、録文が食い違っていることがあるので、注意が必要である(なおこの文書は、官賤民に関わる項に引かれているが、このような分類についても、文書の内容理解とも絡んで、検討の余地があるように思う)。

このほか龍谷大学所蔵の大谷文書も引かれているが、編者も参照したはずの『中国古代籍帳研究』が高昌国時代のものとした(この判断は正当である)大谷4059号文書を、なんの説明もなしに、唐代の雜徭の項に掲げているのは紹介者ならずとも理解に苦しむところであろう。

(N)

■余信シルクロード旅行記を読む■

いわゆるシルクロードの旅行記が書店の歴史物のコーナーに氾濫し始めたのは、もう大分以前のことだが、最近では中国領内、とくに新疆維吾爾自治区のオアシス都市についてページを費やしているものが目につくようになった。そんななかでも昨年はとりわけトゥルファン、それもアスターナ古墳群について紹介したものが、例年になく多かったように思う。論著目録を作成する都合上、できるだけ買い求めて通覧するようにしているが、その一部を紹介してみよう。

「男たちの誰も書かなかったシルクロード」という帯の宣伝文句が印象的な升本順子『女たちのシルクロード』（蒼洋社 1500円）。インドネシア、マレーシア、台湾、そして韓国がなぜシルクロードなのか？、という疑問はおくにしても、全くデタラメなシロモノである。『自由新報』に随時掲載された文章がもとになっているということだが、[アスターナ古墳に眠る王と王妃のミイラ]（下線は紹介者）では、アスターナ古墳群のなかのとある夫婦合葬墓に入った著者は、自分の不勉強を棚上げし、ガイドの女性が説明に窮したのをいいことに、なんと妻が夫に殉死したものだと思ひ込み、あわれを感じているのである。なにを感じようと自由には違いないが、たしかにこれは、男たちの誰も耽らなかった空想であろう。

もちろんその一方で、田川純三『絲綢之路行』（潮出版社 1200円）のように、『文物』誌上に掲載された報告などを参照しながら、アスターナ古墳群とそこから出土した文物についてバランスのとれた説明を試みているものもある。紹介者のように、なかなか出土文物全体に目が行き届かない者には有益でさえある。一部に誤りが認められることはまことに残念だが(199頁, 204頁)、これは著者ではなく、驚くべきことに『文物』誌上の報告執筆者の初歩的なミスなので、著者を責めることはできないばかりか、あらためて一部報告の杜撰さを教えられる結果となった。(N)

【お詫び】一部ふれましたように、本誌第6号と第7号に印刷ミスがありましたので、余白をかりて正誤表を作成しました。お手元の両号をご訂正下さい。

第6号3頁V(25):『新疆歴史叢書』→『新疆歴史叢話』/4頁V(52):V(16)→V(18)/4頁V(57):「唐代的馭家和館馭試釈」→「唐代的馭家和館家試釈」/5頁VI(22):中国敦煌吐魯番学会成立大会暨八三年全国敦煌吐魯番學術討論会在蘭州举行→中国敦煌吐魯番学会成立大会暨八三年全国敦煌學術討論会在蘭举行
第7号3頁V(34):嚴輝中→嚴耀中/5頁V(87):1986年第→1986年第2期/6頁VI(12):(1979年為赴日文物展覽工作)→(1979年為赴日文物展覽所作)/6頁VII(3):葉堯軍→葉曉軍

事務局（連絡先）〒182 東京都調布市国領町5-19-14

荒川正晴方

☎ 0424(81)4633

吐魯番出土文物研究会 (The Research Society for Turfan Relics)